

北陸朝日放送

事業の名称

つなぐ記憶

事業概要

戦後75年以上が経過し、戦争を体験した人たちは年々少なくなっています。遺族会や被爆者団体では、活動縮小を余儀なくされているのが現状です。しかし、戦争を経験した人たちの証言の重さ、生々しさは決して変わることがありません。

戦争の風化が叫ばれる中、北陸朝日放送（HAB）は、悲惨な戦争を二度と繰り返さないために、そしてわれわれ放送局と記者が戦争と向き合う貴重な機会として、長年にわたり石川県ゆかりの戦後企画の報道取材を続けています。

本事業はHABと県内の小学校をリモートで結び、取材・放送した記者が、戦争体験者の記憶を子どもたちにつないでいく取り組みです。教育現場でも、終戦の日を中心に平和について考える機会が必ずあり、教師も毎年、学習内容に苦勞していると聞きます。戦争や平和を後世に伝える点で、メディアも教育も使命は同じ。そこで、平和教育に役立つ授業を行い、同時にメディアの果たす役割への理解も広げる場としました。

■対象：石川県内の小学生

■内容：戦闘体験者の証言を取材・放送した記者によるオンライン授業

（オリエンテーション、戦後企画のVTR視聴、報道記者の話、研究者からの言葉、質問タイムで構成）

■実施校：第1回 2022年11月21日（月）午後1時50分～（45分間）

・石川県七尾市立山王小学校（6年生2クラス、65人程度）

第2回 2022年12月8日（木）午後1時40分～（45分間）

・石川県穴水町立穴水小学校、向洋小学校（2校の6年生、40人程度）

※授業の様子は報道カメラで撮影し、当日のニュースで放送しました

事業の成果

計3校でオンライン授業を実施しました。コロナ禍となってから局舎見学の受け入れを中止していたので、テレビ番組や放送の流れなどの紹介も交え、テレビ放送への関心を高めたうえで「つなぐ記憶」の授業を行いました。

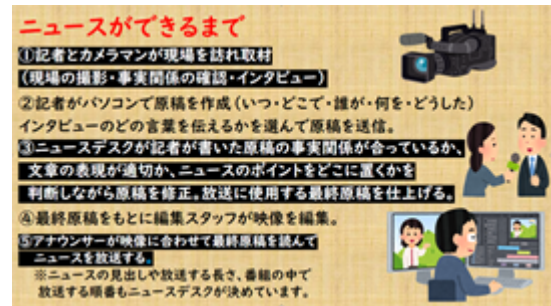
■授業内容の概要

①オリエンテーション

いつもどのような番組を見ているのか、地元のテレビ局の番組を知っているかなどをテーマに進行し、子どもたちのテレビへの関心を高めました。

②報道記者の仕事とは

ニュース番組のシリーズ特集「つなぐ記憶」を担当しているのは、若手からベテランまで幅広い世代の記者。20代の若手記者（第1回）、40代のベテラン記者（第2回）がそれぞれ登場し、日々の取材活動やニュース番組がどのようにつくられるのかをわかりやすく話しました。



③VTRを見てみよう（10分程度）

過去に放送した特集から、授業を受ける小学校に近いエリアの内容を選びました。

第1回：「第二能登丸遭難事故」

終戦直後の1945年8月28日、能登半島の七尾湾を航行していた船が機雷に接触して爆発・沈没し、28人が命を落とした痛ましい事故のお話です。当時の資料がほとんどない中、1980年代に入り、七尾市内の教師たちが生存者の聞き取りを始めた活動も紹介しました。

第2回：「穴水町 まぼろしの水中特攻基地」

戦時中、穴水町麦ヶ浦に小型潜水艦の基地が極秘に建設されたことを紹介。実際に使われることはなかったものの、魚雷格納庫や専用道路の跡地が今も残っています。

④報道記者の話

第1回：20代の若手記者

「この取材をする前は、戦争は教科書に載っている昔話で自分とは関係がないと感じていた」と20代の素直な気持ちを子どもたちに披露しました。しかし、「第二能登丸遭難事故」の証言者への取材を通じ、被害者の苦しみが今も続いていると知り、戦争体験者の高齢化による伝えていくことの難しさ、テレビ記者の責任など多くのことを学んだと話しました。



の取材を通じ、被害者の苦しみが今も続いていると知り、戦争体験者の高齢化による伝えていくことの難しさ、テレビ記者の責任など多くのことを学んだと話しました。

第2回：40代のベテラン記者

実は水中特攻基地の話は、地元のテレビ局や新聞社で報道されていませんでした。何としても伝えたい、多くの人を知るべき貴重なニュースだという思いで取材にあたったと披露しました。戦争は遠い世界の出来事ではなく、私たちが住む地域の中にも、関連する遺跡や遺物が残っています。だからこそ、記者として地元の人のお話を聞き、証言や資料をまとめて放送することで、現代の人たちが戦争を繰り返さないための教訓を残したいと語りました。

⑤研究者からの言葉

第1回：角三外弘さん（石川県七尾市在住、歴史研究家）

※体調不良のため、メッセージを紹介する形式

石川県は空襲による被害がないとされますが、皆がよく知っている七尾湾で機雷の事故が起きたこと、今も8月28日に法要が行われていることを説明しました。そして、平和とは「どんな子どもも安心して生きていける世の中にする事」だと説きました。

第2回：佐藤公男さん（石川県加賀市在住、歴史研究家）

石川県在住で水中特攻基地の史実を調査している歴史研究家をゲストに招き、お話を聞きました。戦争が長引いていたら、多くの若い兵士が穴水湾から小型潜水艦に乗って出撃していたかもしれないと説明し、授業当日が12月8日だったことも踏まえ（1941年12月8日に真珠湾攻撃、太平洋戦争開戦）、戦争の悲惨さや平和の大切さを家族でも話してほしいと語りました。



⑥質問タイム

いずれの回も多くの子どもの手が挙がり、たくさんの質問が出されました。第1回では、機雷事故にあった第二能登丸の船の大きさ、乗員、爆発による衝撃の大きさについてなど。第2回では、格納庫跡地の近くに住む子どもが、「家族から聞いたことがあったが、動画を見てさらによく知ることができた」と話してくれたほか、日本軍がなぜアメリカに攻撃を始めたのか、戦争はまた起こるのか……などの率直な質問も相次ぎました。

■総括

長年続けてきた戦争体験の取材で、多数の証言を集めてきました。一方で、今後は証言者の減少が進み、取材が難しくなることを感じています。オンライン授業の形式によって、能登地域の子どもたちとも簡単につながることができ、戦争や平和について一緒に考える時間を持てたことは、大変有意義だったと考えます。

子どもたちは思っていた以上に熱心にVTRを見て、記者の声に耳を傾けていました。ゲストもわれわれも子どもたちの過去の歴史を知ろうとする積極的な姿勢や、戦争や平和を自分のこととして考えようとする姿勢に感銘を受け、メディアリテラシー活動は児童・青少年にとって重要ですが、放送局自身も学びの多い取り組みであると考えます。今回のような取り組みがさらに広がっていくよう、今後も努力してまいります。

以上